

日銀神戸 支店長の 視点

別所昌樹氏



週末に豊岡演劇祭に行ってきました。劇を鑑賞し、ディレクターの平田オリザさんのトークをお聴きしました。平田さんは、演劇の起源は人類の「伝えたい」衝動と関わっているという見立てでした。また、人類が社会と家族という二つの共同体に属していることが「伝える」必要を生んだというお話もありました。この「伝える」ということ。その大切さと難しさは、日銀で働く中でも折に触れ考えることです。もちろん、「伝える」ことが大切なのは中央銀行に限ったことではありません。例えば企業では、投資家への的確な情報開示が求められます。ただ中央銀行では、「伝える」ことがその独立性と絡めても意識される点でや

中央銀行、「伝える」重さ

や独特かもしれません。中央銀行の役割は端的には、人々が安心してお金を使えるようにすることです。しかし歴史は、中央銀行にインフレ的な金融政策運営を求める圧力がかかりやすいことを示しています。民主主義のもとで中央銀行に独立性が与えられているのは、そうした苦い経験からの知恵といえるでしょう。ただ、独立性は説明責任を伴います。独善に陥ることがあってはなりません。

「伝える」を「伝える」につなげる姿勢も大切です。数式を駆使した説明がふさわしい場面も、直観的な説明が好まれるときもあるでしょう。タイムリーに伝えることも大事です。日銀では、四半期ごとの「展望レポート」についてイラストの入ったハイライトを公表したり、総裁の定例記者会見をライブ配信しています。また「伝える」には、伝えるだけでなく「聴く」ことも必要です。そうしたこともあつて日銀では、広聴活動にも取り組んでいます。